

曲目解説

Lola, Sinfonia

Giacinto Lavitrano (ジャチント・ラヴィトラノ) 作曲

「ローラ」序曲

ラヴィトラノは、19世紀後期イタリアのイスキア島に生まれ1938年12月16日アルジェリアのボーナで逝った作曲家。フランス人から音楽の手ほどきを受け、ナポリでパオレッティから和声と対位法を学び、その後多くの作曲コンクールに入賞した。マンドリン音楽ではトリノで「ローラ」序曲(イル・マンドリーノから1902年9月出版)パリでは「レナータ」がエステイユティアンティナから1910年5月出版。ミラノでは「ロマンツァとポレロ」が入賞(イル・プレットロから1910年1月出版)した。これらは彼の代表作とされ、名曲として度々演奏されている。晩年、1930年頃にも「すべては去りぬ」、「晩年に」などを円熟した技法で作曲したが、その頃は世界的にマンドリン音楽が衰退していた関係上、今日ほとんど知られていない。本曲は19世紀、欧州各都市でその艶名をうたわれた舞姫「ローラ・モンテス」をたたえて作ったと云われている。ローラ・モンテスは、1818年アイルランドに生まれすぐ侍女と二人きりでスコットランドの森の中で育ち、この間に大自然から情熱的な踊りをおそわったと云われている。彼女は、国王親衛隊の将校と結婚してインドに渡った。これが彼女の情怨史の始まりとなる。その後ヨーロッパを点々とし、どこに行っても民衆の人気を一身に集めたほどの美しい女性であった。城を傾け、王冠を奪い、名誉を、財産を、鮮血を、男を思うがままに翻奔した妖姫も衰え、42才の生涯をニューヨークの貧民窟で閉じるわけである。この彼女をたたえた「ローラ」序曲は全般に典雅であるが、随所に現れるアレグロの部分に於ける軽快奔放さと、アンダンテの憂愁・繊細さは美しい対象をもって現われ、それが巧みに融合されプレクトラム楽器のもつ特徴がいかに発揮され、名曲という名をほしいままにしている。

Giardino d'estate~Crepuscolo

Primo Silvestri (プリモ・シルヴェストリ) 作曲

「夏の庭」 黄昏

シルヴェストリは1871年5月9日、イタリアのモデナに生まれ、1960年2月6日、同地にて逝去した作曲家。14才の時から音楽を学びはじめ、ギターをセルミ教授について習い、その後次第にマンドリンに非常な愛着を持つに至った。更にペザロの音楽学校教授ピアンキーニに和声、対位法とピアノを学び、モデナのウンベルトI世吹奏楽団の指揮者に任命され、後モデナ・マンドリン合奏団を創設した。1901年にはローディに於ける国際マンドリン演奏コンクールの会長に推され、アルドロバンティ教授の死後、彼の主宰したボローニアのイル・コンチェルト誌の主幹となって、イタリアマンドリン界を啓蒙すると共に数多くのマンドリン曲を作曲、特に1941年シエナで催されたマンドリン作曲コンクールに応募受賞した本曲「夏の庭」の優婉さは絶品である。マンドリン界きっての最長命で、その作曲活動も半世紀を越えているのは珍しい。第2次世界大戦の最中、イタリアのシエナに於いて1940年及び1941年の2回に亘り、マンドリンオーケストラの為にオリジナル作品の全国コンクールが行われた。本曲は第2回のコンクールで3位に入賞した作品で、原曲にはクワルティエーノやマンドラコントラルト等も入り、第一、第二マンドリン、マンドラテノール、マンドロンチェロ等は2〜3部の編成で成り立っている。時恰もイタリアではマンドリンが衰退した頃で、上演もされず陽の目を見えていなかった。同志社大学マンドリンクラブOBの岡村氏により、シエナのA.Bocci氏より譲り受けられたのを本邦に紹介された。非常に旋律の美しい幽遠な抒情曲である。

1976年4月3日同志社大学マンドリンクラブ静岡演奏会(静岡市公会堂)にて初演。

“Festa di Nozze” Fantasia in 3 tempi

Giuseppe Manente (ジュゼッペ・マネンテ) 作曲

幻想曲「華燭の祭典」

小穴 雄一 編曲

1867年2月2日イタリア中部のサンニオのモコーネに音楽家を父として生まれたマネンテは、幼い頃から音楽を好み、長じて王立陸軍学校付属の軍楽隊に入り、1903年には歩兵第六十連隊軍楽長になり以後各地の軍楽長を歴任。戦争にも参加し、祖国を守る若人の為に作曲した「小英雄」が大いに味方の士気を鼓舞し、勲章を叙せられた。

本曲は軍楽長時代に「降誕祭の夜」、「国境なし」などを書いた作曲意欲が最も旺盛な37才頃の作品であり、イタリアの著名な作曲家ボルゾーニ、テュエク、ウォルフ・フェラーリ等の賞賛を得た。原曲は吹奏曲である。本曲は、中野二郎氏の編曲で1966年6月18日同志社大学マンドリンクラブ第68回定期演奏会(大阪毎日ホール)で初演して以来、マンドリン合奏曲の名曲として本邦に定着した。本日の演奏は昨年35回定期で演奏した組曲「展覧会の絵」の編曲者 小穴雄一氏の編曲版を用いる。

第一楽章 人々の祝福 (Allegro con brio)

最初の不完全小節の一音、それに続くリズムカルなシンコペーション。第一楽章の魅力はこの一小節に凝集して圧倒的に我々を打つ。

第二楽章 教会にて (Andante Religioso)

静かに重々しく曲は始まる。つづいてマンドチェロの低音の上にマンドラの二重奏が8小節にわたって奏され、徐々に気分が盛り上がる。そしてついには宗教的感動にまで達する。華燭の典も最高潮である。

第三楽章 家族の祝宴 (Allegro Festoso)

一転して軽快なメロディーが流れる。そこには家族の喜びがあふれている。この三楽章は曲想、テンポともめまぐるしく変わり、テクニクも高度なものが要求される楽章である。興奮の頂点は第一楽章の主題の再現となってあらわれ、曲は最後のヴィヴァーチシモで堂々と終る。

Carmen Suites

Georges Bizet (ジヨルジュ・ビゼー) 作曲

「カルメン」組曲

佐藤 洋志 編曲

ジヨルジュ・ビゼーは1838年10月25日、パリで生まれ1875年に37歳という若さで没した。10歳でパリ音楽院に入学。そこでグノーなどに教えを受け、18歳の時カンタータ「ダビデ」でローマ賞を受賞。以後、歌劇「真珠採り」、組曲「子どもの遊び」など数々の作品を発表した。パリのオペラ・コミック劇場から3幕のオペラ・コミック(台詞の入ったオペラ)の注文を受け、メリメの小説「カルメン」を題材に1873年から74年にかけて歌劇「カルメン」を書き上げた。初演は1875年のオペラ・コミック劇場。そのころの歌劇といえば、派手な舞台装置にバレエ・シーンの入るグランド・オペラが全盛で、オッフェンバックらが始めたオペレッタが登場し始めたという時代である。オペラ・コミック劇場の設立の趣旨自体も、上品な恋愛ものなど家族連れでも安心して見られる「穏やかな」歌劇の上演を目的としていた。そこへいかにも「過激」な歌劇「カルメン」の登場。どう見ても「上品」とは程遠い主人公カルメンは、自由奔放な生活をし、許嫁のいる男性を誘惑する。おおっぴらに密輸入団が登場し、最後に色恋沙汰の殺人でエンディング。「カルメン」の初演が失敗に終わったのは有名な話である。しかし、数日たつと、その「不道徳さ」「不適切さ」という物語の内容はかえって評判を呼び、初演からビゼーの亡くなる3ヶ月の間に33回も上演されるほどの成功を収めた。さらに、ビゼーの死後、友人のエルネスト・ギローが、コミック・オペラの特徴である台詞の部分にリチタティーヴォ(叙述的な独唱曲)

に置き換えてグランド・オペラに改作し、さらにこのオペラとは無関係のビゼーのバレエ音楽を挿入した版をウィーンで上演し大成功を収めた。生々しい人間のドラマが展開される台本の素晴らしさと、心にストレートに訴えかけるエキゾチックな雰囲気、そして隅から隅まで名曲ぞろいという音楽。歌劇「カルメン」は今では最も人気のある歌劇の一つとして世界中に愛されている。なお、ビゼーは一度もスペインに行ったことがないという。原作者のメリメもフランス人である。一般的には「カルメン」すなわち「スペイン風」と思われているが、厳密には、フランス人が想像で描いたスペインと言う事になる。ビゼーの音楽にそれだけ説得力があるという事なのだろう。

「カルメン」は、演奏会で取り上げられる場合は「組曲」として演奏されることが多い。各幕への前奏曲を4つセットにした第1組曲とオペラの中のアリアを管弦楽で演奏する第2組曲がある。その他、シチェドリソが弦楽合奏と打楽器のために編曲した組曲も有名である。本日演奏する曲目は、第1、第2組曲によらず全体を混合し、独自の曲順としている。ただし組曲の最後は、「第2組曲」の通例にしたがって「ジプシーの踊り」とした。

〈歌劇「カルメン」のあらすじ〉

時は1820年代のスペイン。故郷にミカエラという許嫁を残し、ドン・ホセはセビリアの竜騎兵を勤めている。彼はそこでジプシーの女性カルメンと出会う。ある日、喧嘩騒ぎを起こした彼女をホセは監獄へ連行しようとするが、彼女は彼を誘惑し、見事に彼の心をつかみ、縄をほどかせて逃亡する。ホセはカルメンを逃亡させた罪で獄につながれる。

その2ヶ月後、闘牛士のエスカミーリョはカルメンと酒場で出会い、彼女にひかれ始めていく。ホセの上司であるスニーガもカルメンにご執心。その酒場へ獄から釈放されたホセがやってくる。カルメンは愛しているのなら一緒に仲間に加わらないかと彼を誘う。そこへスニーガが登場し、ホセをののしり、騒ぎが起きる。その騒ぎの中で結局ホセは彼女の密輸団に加わる。

軍隊を捨て密輸団の暮らしを始めたホセのもとへミカエラが「母親が危篤だ」と伝えに訪れ、一緒に故郷へ帰ろうと言う。すでにカルメンの心はホセから離れ、闘牛士のエスカミーリョに傾いていた。ホセは故郷へ帰る決意をする。

闘牛の日、カルメンはそこでホセと再会する。ホセはカルメンに「もう一度やりなおそう」と哀願するが、彼女は冷たく彼をはねつける。ドン・ホセは絶望のあまりカルメンを刺し殺す。

1 Prelude「第1幕への前奏曲」 から 「Andante moderato」

宿命のテーマとも言える不吉なカルメンの主題。このテーマは、オペラの中でたびたび登場する。この1曲にオペラ全体がうまく集約されており、最後でドン・ホセが「俺が殺したのだ！ああ、いとしのカルメン」と泣き叫ぶ場面にも現れる。

2 Aragonaise「アラゴネーズ」

スペイン色豊かな間奏曲。キビキビとしたリズムに乗った全合奏に続いて、哀愁を帯びたメロディが奏される。

3 Habanera「ハバネラ」

カルメンが最初に登場する場面で“恋は言うことをきかない小鳥のようさ”と歌う有名な曲。なんと歌詞もビゼーの作。ビゼーはこの曲を12回も書き直したそうである。恋は言うことを聞かない小鳥 飼ひ慣らすことなんか誰にもできない 恋はジプシーの生まれ あたしに好かれたらあぶないよ！と歌い、広場にいた伍長のドン・ホセに花を投げつける。後半では、カルメンの歌に応じて、男声合唱の合いの手が入る。

4 Intermezzo「第3幕への間奏曲」

原曲は、有名な「アルルの女」のメヌエットのようにハーブの分散和音の上にフルートの牧歌的メロディが演奏される。実際、この曲はもともとは「アルルの女」のために作曲されたものである。

5 Sguedille「セギディーリャ」

カルメンの歌う歌では、「ハバネラ」同様に有名な曲である。速い3拍子のスペイン舞曲で、「リリアス・バステアの酒場に行こう」とホセを誘う。

6 Les Dragons D'alcala「アルカラの竜騎兵」

第2幕の間奏曲。竜騎兵というのは鉄砲を持った騎兵のことである。カルメンでは第2幕以降なぜか、前奏曲と呼ばずに間奏曲（インテルメッツォ）となっている。カルメンに惚れ込んだホセが酒場に向かう途中で歌う鼻歌である。

7 Prelude「第1幕への前奏曲」

歌劇の冒頭に演奏される躍動感あふれる有名な曲。スペインの太陽と情熱を思わせ、この歌劇の内容を見事に表している。一度聴いたら忘れられないアトラクティブな音楽である。

8 Torero「トレロ(闘牛士の歌)」

闘牛士のエスカミーリョが歌う有名な闘牛士の歌。中間部は、第1幕への前奏曲の中間部に出てきた、エスカミーリョのテーマといえるメロディである。しかし、本日の演奏はシCHEDリンの舞踊音楽版が下敷きになっており、重要なところでメロディが消える。いわばカラオケであり、メロディは聴く側の心の中で奏されるという粋な編曲である。これは「カルメン」が広く親しまれた名曲でなければ成り立たない。メロディが消えた後の対旋律として、第4幕の最後の場面(ホセがカルメンを殺すシーン)で演奏される悲劇的な旋律が用いられている。

9 Gypsy Song「ジプシーの踊り」

第2幕酒場の場面、カルメンと女友達が店の客の将校達のために踊るのがこの「ジプシーの歌」である。実際の歌劇の舞台ではフラメンコ・ダンサーの見せ場となる。カルメン全曲の中でもいちばん盛り上がる曲と言えよう。

マンドリン合奏への編曲の試み

マンドリン奏者の青山忠氏の依頼によりクリスタル・マンドリン・アンサンブル(青山忠氏が主宰)の為に編曲、第12回定期演奏会(1996年6月1日東京都武蔵野市民文化会館小ホール)で初演、好評を得た。今回の演奏は、従来の初演版に第1幕の「セギディーリャ」を新たに加え、曲順も第1版から大幅に入れ替えて第2版の初演版として演奏する。

編曲者紹介 佐藤洋志(さとうひろし) 1968年東京都三鷹市生まれ。

中学時代にクラシック音楽に目覚め、慶應義塾志木高等学校でマンドリンクラブに入部、マンドリンを始める。大学時には、JMJ主催第51回青少年音楽祭に参加。今村能氏のもとでコンサートマスターを務め、好評を博す。同時期、慶應義塾志木高等学校や跡見女子短期大学マンドリンクラブなどで指揮や編曲活動を行う。現在、メトロポリタン・マンドリン・オーケストラでコンサートマスターを務め、編曲活動にも力を注ぐ。マンドリンを遠藤隆巳氏に師事。

福岡シンフォニックマンドリンアンサンブルでの佐藤氏の編曲作品は、25回定期の歌劇「ルスランとリュドミラ」序曲、34回定期のアルジェリア組曲、35回定期のアンコール曲「亡き王女の為のバヴァーヌ」に続いて4曲目である。

今回の演奏にあたり快く演奏の許可を頂きました事、心よりお礼申し上げます。

第 36 回定期演奏会に寄せて 松永恒一

福岡シンフォニックマンドリンアンサンブル (FME) は創立 43 年を経る歴史のある合奏団である。その間さまざまな紆余曲折があったが、特に今世紀に入ってからの音楽活動には、関東・関西方面からも評価を頂くなど充実したものを感じる。私は 20 数年来指揮に携わっているが、この数年で FME の演奏技術は大きく向上したと思う。よく磨かれた鏡のように指揮棒の軌跡を音に反映する。何年やっても毎回新たな気持ちで指揮台に立つことが出来るのは、団員の音楽に対する熱意のおかげである。合奏にあっては常に「ライブ」、すなわち音楽の一回性にかける気概が感じられることは、FME の際立った特質と言って過言ではない。現在の団員は 50 数名。大半が学生マンドリンクラブの出身者であるが、FME に所属して初めて楽器を手にしたメンバーもいる。幅広い年齢層に加えて、このことは FME のもう一つの特徴である。演奏技術は人それぞれ異なるが、なによりも音楽を理解し、そして楽しむ気持ちが団員を結びつけている。福岡市やその周辺はもとより、鹿児島、長崎からも通常の練習に参加するメンバーがいる。定期演奏会には大阪や東京からもメンバーが駆けつける。大変な努力と熱意なしでは出来ないことである。同じ時間が二度と戻って来ない様に、音楽とは常に一期一会であり、「例年どおり」や「以下同様」の時間は一刻としてない、と改めて思う。どんな時でも常にベストを、これを基盤に演奏活動を続けていきたい。

私事であるが、20 年ほど前、機会があり九州交響楽団の演奏するオペラ「カルメン」に出演したことがある。エキストラとしての出演であったが、初めて接する歌劇の世界に大いに触発された。それまで歌劇には余り馴染みがなかったが、果物売り(第 1 幕)、酒場の客(第 2 幕)、密輸団の一員(第 3 幕)、闘牛士の剣持(第 4 幕)などに扮しながら、この著名な歌劇の醍醐味をステージ上で味わった。以来、本曲には特別な思い入れがある。

本日の演奏にそれが生かせれば幸いである。